魔術師の街へようこそ

夜那國

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔術師の街へようこそ

【Ｎコード】
Ｎ３７６０Ｗ

【作者名】
夜那國

【あらすじ】
魔術師の街、月ノ宮。この街に異変が起こる。この異変を解決すべく、陽ノ宮管理局局員櫻井が月ノ宮へやってくる。
朱鷺羽家の少年、咲炉（ざくろ）は月ノ宮高校の一年生。寮が焼けて住む場所を失った咲炉は、吸血鬼の少女と一緒に暮らす事に！
彼と、彼の愉快な仲間達との物語をどうぞ。
『魔導師の街へようこそ』を読まなくても読めますが、第一章までは読む事をお勧めします。

用語

【用語】

・【神】
試験の末就ける役職。主に、ダークと戦うのが務め。

・【ダーク（＝魔人）】
龍脈の影響を受け暗黒面に墜ちた魔術師の事。
人知を超えた力を持ち、並大抵の事では死なない。
魔人とも呼ばれている。

・【龍脈】
地球の生命エネルギー。その力は大きな影響力を持ち、魔術師に魔力を与える。世界各地にあるが、特に大きな龍脈は四ノ宮に存在する。

・【魔力】
龍脈のエネルギー

・【魔術】
自分の中の魔力を使い何かしら現象を起こす事。

・【魔術師】
魔術を扱う者。

・【魔術炉】
心臓の別称。魔術師が魔力の許容量はほとんど魔術炉で決まる。

・【魔導】
魔力からどのように自然現象が起きているか解明する学問。

・【魔導師】
魔術が使えないが、魔術の知識のある一般人。研究者とも呼ばれる事がある。
少しでも魔術が使えれば、原則魔術師扱いになる。

・【ＳＰＥＬＬ　ＣＯＤＥ≪スペル・コード≫】
誰にでも魔術が使える簡易魔術器具。魔力を瓶に入れたタイプが一般的。
瓶を割って発動出来る。
物質に付加する事も可能。
その場合、使い捨てではなく、半永久的に使用することが出来る。
例外もあるため、絶対無限に使えるわけではない。
基本的に魔術師は好んで使わないが、魔術自衛軍が使うようになってからは少し抵抗が無くなって来ている。

・【夜の獣≪ナイト・ビースト≫】
魔導師が生命掌握を目指す過程で作る生物兵器。生きているものを襲い、魔力を喰らい、成長する。
ほとんどはすぐに狩られる。

・【亡霊≪ゴースト≫】
ダークが作り出した生物兵器。人に乗っ取る力を持ち、魔術自衛軍のメンバーでも苦戦を強いられる。

用語（後書き）

２０１１年９月８日ゴースト：亡者→亡霊に修正

登場人物

・【朱鷺羽　咲炉≪ときわ　さくろ≫】
本編の主人公。

・【白月　京≪しろつき　きょう≫】
吸血鬼。金髪でポニーテールの良く似合う少女。ある夜、咲炉に助けられて以来、好意を寄せる。

・【白月　実有≪しろつき　みあり≫】
吸血鬼。開業医で小さな病院を経営している。四医の一人。

・【八切　霧刃≪やぎり　きりは≫】
歴史ある八切家次期頭首。
咲炉の友人。

・【ドレア・アルマ】
月ノ宮の魔術師の中で五本の指に入る実力者。
元・奪われた者≪ロスト≫のメンバー。

・【朱鷺羽　咲夜≪ときわ　さくや≫】
咲炉の姉。魔術自衛軍≪メイガス≫に所属している。

・【櫻井】

陽ノ宮管理局で働く青年。有休を使い、自分の目的のために陽ノ宮に来た。

登場人物（後書き）

２０１１／０９／０３　姐→姉　に修正

有休　櫻井、月ノ宮へ

「久しぶりだな……」
青年はその街に着き、呟いた。この街に来るのは本当に久しぶりだった。陽ノ宮の管理局で働く青年にあまり休みは無かった。
今回は溜まりに溜まった有休を使ってこの街に来ている。
陽ノ宮が魔導師の街なら、この街月ノ宮は魔術師の街。この街に住む人間のほとんどが魔術師だ。
青年は欠伸をする。最近の疲れがどっと来る。
（さっさと宿を取ろう）
青年は歩き始めた。
街は賑わっている。
（今日は何か催し物でもあったか？）
青年は歩いていると、売り子に話しかけられる。
「こんにちは！　この魔導具どうでしょうか？　魔術自衛軍（メイガス）が認めたスペル・コードですよ」
「いや良いよ」と青年は断る。
「そうですか……」
売り子の少女は少し寂しそうな表情をする。
だから、青年は「……まぁ、このスペル・コードなら持ってて損は無いか」と言い、少女に「全部くれないかな？」
と言い放った。少女は喜ぶ前に驚いた。このコード決して安い物ではない。それを、全部。聞き間違えでは無いかと聞き返す。
「全部ですか」
「ああ、全部だ」
青年は鞄から札束を取り出す。
青年は普段金を使わない。生活費以外は全て貯金してきた。
「ありがとうございます！」
金を見た瞬間、少女は笑顔になる。青年は何とも微妙な心境にな

る。
（まぁ、この笑顔を見るために金を払ったと思えば安いものか……）
青年は自分に言い聞かせ、納得する。
「お兄さん、どうぞ」
売り子の少女はお金を受け取ると、コードを包みに入れて手渡す。
「あろがとう」
コードの入った包みを鞄に入れる。すると、少女が話しかけてきた。
「お兄さん、月ノ宮の外から来たんですか？」
「そうだよ」
少女は珍しいものを見るかのように青年を見つめる。
「本当ですか！」
少女は先程よりも目を輝かせる。
「ああ」と応えると、少女は青年を質問攻めする。青年は困ったように一つ一つ丁寧に答える。
少女ははっとする。
「ああ、すみません。ご迷惑でしたか？」
青年は「そんな事は無いよ」と微笑む。
「この街は良い街ですよ」
青年がこの街に来るのは初めてではない。住んでいたこともある。だが、ここで、「知ってるよ」と言うのはあまりにも無粋だった。
「だから、ゆっくりとしていって下さい。あと、もし良かったら、またコードを買いに来て下さいね」
少女はエプロンのポケットから店の地図が書かれた紙を出し、青年に渡す。良く出来た娘だと思わず感心してしまった。
『つぐみ～、こっち手伝ってくれる？』
「はーい」
少女は、「すみません、これから仕事です」と言って去って行く。
途中まで、走り、足を止め、青年の前に戻って行く。

「ああ、そうだ、一つ言い忘れてました」
少女は青年の顔を見上げ言った。
「――月ノ宮へ……魔術師の街へようこそ」

有休　櫻井、月ノ宮へ（後書き）

サイドストーリーも開始です！　こっちのプロットはまだ、未完成なので、更新は遅めになると思いますが、どうぞ、よろしくお願いします！

第1話　住む場所が無くなった

『ブォウォゥウウウウウウ』

爆発音。建物は燃え盛っていた。

ここは月ノ宮高校学生寮。生徒が寮内で魔術を使用し、この事態に至ったようだ。

「……まじかよ」

幸い寮内には、事件を起こした生徒以外はいなかった。

少年は、呆然としていた。昨年まで住む場所が無く、高校に入ってようやく手に入れた住まいが延焼しているからだ。

それだけではない、全財産から学校の道具まですべてが焼けている。

不幸な事に、事件現場の近くに少年の部屋があった。だから、万が一自分の物が無事である可能性は無かった。

『うわー焼けてるよ』

『あっちゃー』

『まぁ、良いか、仮の住まいだし』

『パパに頼んで早急に別荘建ててもらおーっと』

少年は金持ちが嫌いだ。月ノ宮高校の生徒のほとんどが金持ちだ。だから、少年はこの学校の生徒があまり好きではない。

少年は諦める。焼けたものはもう帰ってこない。絶望に浸っていても何も得る物がない。大切なのは”今”なのだから。

「さて、行くか」

少年は歩き出す。友人、それも時期月ノ宮管理者の家へ。

◆

「やーぎりくーん」
少年は家の前で友の名を呼ぶ。インターホンを押すと執事が出て気不味い。

『ぎゃぁあああああああああああ！』

爆音。この馬鹿でかい屋敷内で何が起こってもおかしくない。
だが、この叫び声は別だ。少年はこの声に聞き覚えがある。
「まさか……。霧刃！」
少年は、屋敷に入って行く。そこにいたのは二人。一人は眼鏡を掛けた白衣の魔術師。
もう一人は少年の良く知る人物。
「霧刃、無事か？」
八切霧刃（やぎりきりは）。代々月ノ宮管理者を務めている八切家の次期頭首。
その次期頭首と少年は友人だった。
「……」
返事がない。
「許せ、霧刃！」
少年は容赦なく肘で霧刃の鳩尾を抉る。
「――ぐふっ」
苦悶の表情を浮かべながらのたうち回る。
「死んだらどうする！」
霧刃は立ち上がり少年に言った。
「……あっ」
「あの、咲炉君、今君は僕を殺しかけましたよ」
「いやいや。オレは蘇生を施しただけだ」

少年は冷静に返す。
「――そもそも、何で気絶を？」
「……咲炉、すまん、しばらく〝あの悪魔〟の修行だ」
霧刃の視線の先にいたのはまさしく悪魔。
霧刃を襲った爆発を起こした張本人。
ドレア・アルマ。月ノ宮の魔術師の中でも五本の指に入る実力者。
彼は、八切の家に雇われ、現在霧刃の師匠をしている。
「起きたなら続きだ」
「咲炉、早く行け。死ぬ、絶対死ぬ」
オレの家の件で話が……などと切り返せる剣幕ではなかった。
足早に八切邸を去る。すると、

『ぎゃぁぁぁああ』

霧刃の悲鳴が聞こえる。
「よし、聞かなかった事にしよう」
少年は、宿を求め街を放浪した。

◆

夜の月ノ宮は、陽ノ宮に比べ安全だ。『夜の獣』を放つ魔導師もいない。
青年が探していたのは宿だけではない。この街の不穏な影。陽ノ宮だけでなく、この街でも何か起こることを青年は知っていた。
「……いた」
路地、人通りの少ない場所に、それはいた。

亡霊（ゴースト）。魔導師が作り出した生物兵器が『夜の獣』だとしたら、ダークが作り出すのが亡霊だ。
魔人とも呼ばれるそれが、目覚めている事を青年は知っていた。この地に封印されていた魔人の事を。
青年の目的の一つは、この亡霊を退治すること。メイガスの協力も無しに一人で……。
青年の得意とする魔術は他の魔術師の魔術と少し勝手が違っていた。
「……結晶化」
魔力を圧縮し、具現化する魔術。この魔術の異端な点はほとんど魔力を消費しないことにある。大気中の魔力を使えば魔力の消費を抑えられる。それが、この魔術の利点である。
青年は魔力で剣を作る。半透明の蒼の剣。それが、青年の武器。
青年は駆ける。亡霊を一刀両断する。
『……？』
亡霊は訳もわからず死に至る。青年の描いた軌跡を美しく洗練されたものだった。
「……結晶化」
いくつも足場を作り螺旋階段の様なものを作り上る。遙か上空まで。街を見渡す。
「……視覚強化」
魔術により視力と視界が広まる。残りの数は三体。青年は結晶化で足場を作り駆ける。
落下、亡霊に直下する。
『……グギャゥ！！』
異形の生物は奇妙な呻き声を上げ絶命する。
「……あと、二匹か。急がないとな」
亡霊と夜の獣との違いは、亡霊は人に乗り移れるという事だ。朝が来れば、亡霊は力を増し、人間の身体を乗っ取る。それだけは未然に防がねばならない。

『キャァアアアアアアア』
叫び声。若い女の子声だ。
青年は黙々と現場に向かう。焦りはしない。この事態も予測の範囲内だからだ。
「なっ！」
ただ、一つの予想外は、その場に朱鷺羽咲炉がいた事だった。
朱鷺羽咲炉は少女を庇い血を流し倒れていた。
「結晶化！」
青年は、咲炉の傷口を結晶化で塞ぐ。これで応急処置は完了する。
『……グルゥウゥゥウウ』
異形の化け物が青年に襲いかかる。
「結晶化」
青年は槍を作り、異形の目を抉る。
『グォゥヅヅゥウ』
そして、トドメ。新たに作った剣で腹を切り裂く。
暗黒が放たれたの如く霧が発散される。

「大丈夫か？」
青年は、少女に話しかける。
「はい」
その金髪の少女は答える。
「そいつを頼む。オレは、まだあの化け物を退治しないといけない」
「わかりました」
少女は動揺を隠していた。いや、隠せていなかった。身体は震え、とても冷静だとは言えない。
だから、青年は、
「大丈夫だ、心配ないさ」
声を掛けた。少女の不安な心を取り除くかのように。

「朱鷺羽家の人間は丈夫に出来ている。家に帰って治療を頼むと良い」

青年はそれだけ言い、その場を去って行った。

第1話　住む場所が無くなった（後書き）

第1話でした。これからはこちらの作品の応援もよろしくお願いします。

第2話　ある夜の出来事

ゴーストが現れる前、少女は男達に絡まれていた。
少女の容姿は目を引くものがある。黄金の様な髪に、宝石のような紅い瞳。彼女は吸血鬼に分類される。
神話の吸血鬼ネクロアシアの子孫に当たる彼女でも、かの吸血鬼のような力を持っているとは限らなかった。
だから、そこにいるのは普通の女の子だ。男達に絡まれ、震える少女。姉に頼まれ、少しコンビニで買い物をしていただけなのに……。少女は後悔する。もっと、人通りの多い道を選ぶべきだったと。近道だからといってこの時間に暗くて人通りの少ない道を通るべきではなかったと。
「お嬢ちゃん、こんな夜遅くに一人でどうしたの？　お兄さん送ってくよ？」
「大丈夫です。一人で帰れます！」
「そんな冷たいこと言わないでさぁ――」
汚い手が少女の華奢な肩に触れるか触れないかの瞬間、
「はーい、そこのお兄さん、その汚い手がその子に触れた瞬間、オレはアンタらを殴ったり蹴ったりするわけだけど？　良いかな？」
少年が現れ、男共にそう言い放った。
「何言ってるんだ？　このガキ」
少年は男に怯える事無く堂々と言い放つ。
「いや、それ、オレの彼女なんで。はぐれちゃって……返して貰えます？」
少年は毒気の無い笑顔を浮かべ、歩み寄ってくる。
もちろんそれは嘘だ。少年はこの吸血鬼の少女と話した事は無い。
「嫌だね」
リーダー格の男が言った。
「お前一人袋にすれば、この女は俺達のものだ」

男共は汚い笑い声を上げる。
「はぁー」少年は溜め息を吐く。汚い人間の言葉から予想通りの汚い言葉。可憐な少女の前でくらい少しは言葉を選んで欲しいと少年は思う。
「さぁ、どうする？　この人数だ。今から謝っても――」
少年は、その瞬間、リーダー格の男の視界から消えた。
「朱鷺羽流……は使わなくて良いや」
少年は背後を取り、リーダー格の男の首に強打を与える。男は泡を吹いて倒れた。
「さて、どうしましょ？」
あっさり屈強なリーダー格の男を倒す。
朱鷺羽家の少年の力をもってしても、少女を救うという条件ありでのこの数はきついものがあった。
（――じゃあ、これしかないか）
「とう、とう、えい！」
少年は、少女を囲っていた男共にそれぞれ顔面に一発入れる。その隙に、少女の手を掴む。
「走るぞ！」
「う、うん」
少年は少女の手を掴み、必至で走った。
しばらくして、男共は追って来なくなる。
「あの……、」
少女の方から話を切り出した。
「朱鷺羽咲炉君ですか？」
「ああ」
「私、白月京（しらつききょう）と言います。助けて貰ってありがとうございます」
咲炉は丁寧な口調をむずかゆく思う。
だから、彼は、
「同い年なんだし、そんなかしこまらなくて良い」
と、うながした。

「そうです……そうだね」
少女は笑う。
すると、腰を抜かす。先程の恐怖が今になって来た。
「わっ！」
「大丈夫か？」
咲炉は京の腕を掴む。そのまま引き寄せる。
「ありがとう」
京は俯き、顔を赤くする。
「どういたしまして」
朱鷺羽咲炉が、白月京を知っていた理由は、彼女の姉がちょっとした有名人だからだ。白月実有（しらつきみあり）。小さな病院の医院長でありながら、四ノ宮屈指の医者、四医の一人。その妹、白月京の事も自然に咲炉の耳に入っていた。
白月京が、朱鷺羽咲炉を知っていた理由は、彼の一族自体が有名だからだ。母方の先祖は神話の吸血鬼シュウム＝ネクロアシア。その友人である闘神朱鷺羽の子孫は少なからず縁があると京は感じていた。
「朱鷺羽くんはこんな人のいない路地に？」
ふとした疑問を浮かべる。
「少し用が……」
「用って？」
「……ごめん嘘付いた」
「……」咲炉はバツの悪そうな顔をして、正直に「迷子だよ」と答えた。
「方向音痴でね」
「意外だね」
「何が？」
「朱鷺羽くんって何でも出来るイメージあったから……そういう欠点があるとは思わなかったよ」
「……それは姉さんのイメージだ」

彼の姉、朱鷺羽咲夜は四ノ宮始まって以来の天才児で、彼女の名を知らない者はいない。その弟の存在もまた、知らぬ者はいない。
咲炉が決して優秀でないわけではない。ただ、姉の世間の評価により、咲炉の能力まで脚色されているというわけだ。
「姉が優秀で有名人だと苦労するもんね。私もそうだからわかるよ」
「……そうか、四医の姉を持つと同じような境遇になるか」
「大変だよな」
「大変だよ」
うんうん、と頷く二人。
そこで、もう一歩踏み込む。
「そもそもこんな時間にどうして外に？」
「家が、ていうか寮が火事で……住む場所が無くなってね。ついでに全てが焼けて無一文なんだ」
「そんな事か？」
「ああ、だから絶賛住めそうな場所を探していたんだ。月ノ宮高校はセキュリティーが厳しいから侵入できない。だから、学校は無理だ。男子寮は今整備が入って駄目だ。女子寮に忍び込んで、空き部屋使う事も考えたがリスクが高すぎる。だから、公園を探していた」
「公園？」
「知り合いのホームレスがいる公園を」
咲炉は月ノ宮に来てから極貧生活を強いられていた。家賃が払えず、放浪していた所、手を伸ばしてくれたのは、公園のホームレスだった。以来、咲炉は各所のホームレスと親交がある。
「知り合いのホームレス……？」
「頼めば寝る場所には困らないし、彼等は食べられる雑草、食べ物を恵んでくれる場所などを知っている。侮れない」
咲炉の目は真剣そのものだった。
「あ、あのもし良ければ――」
その時だった。”それ”が現れたのは。

「　　」

異様な化け物が現れたのは。

全てにおいて、異様。この世の生き物ではないと思わせた。

「　　」

声を上げている筈なのに、二人には聞こえない。人とは違う。離れすぎている。

だから、その声を聞き取る事は出来ない。聞こえる者がいるとすれば、コイツと同じ、それ以上の力を持つ者だけだ。

咲炉は直感する。コイツには勝てないと。殺されると。逃げようにも、気付けば相手の射程範囲内。動けばやられる。

京は動けない。その化け物に対してまとまもに恐怖を感じてしまったからだ。

「　　」

ゆっくりと近づいてくる。手が伸び、二メートルを超える。先端は刃物の様に光沢を帯びている。

「　　」

それは、京に攻撃を仕掛ける。その一撃が致命傷になるであろう一撃を……。

京の顔が血で赤く染まる。辺りも血で赤く咲く。

「……無事……か？」

咲炉は切り裂かれた腹を押さえ、訊ねる。京を庇い傷を負う。幸い致命傷は防げた様だ。

「頼むから……逃げてくれ……」

咲炉はそのまま膝を付いて倒れる。
『キャァアアアアアア』
叫ぶ。恐怖で、誰かが来て助けてくれる事を祈って。
『　　』
化け物の手が振り上がる。今度こそ京の命を奪うために。
その時、誰かが現れた。
「結晶化」
瞬時に咲炉の傷口を結晶化で止める。
「結晶化」
次に槍を作り、異形の目を抉る。
『　　！』
京に見えないようにトドメを刺す。この化け物が死ぬ姿を青年は京に見せたくなかった。
「大丈夫か？」
青年は、京に話しかける。
「はい」
「そいつを頼む。オレは、まだあの化け物を退治しないといけない」
「わかりました」
京は動揺を隠していた。いや、隠せていなかった。身体は震え、とても冷静だとは言えない。
医者の姉が言っていたのだ。こういう時は誰よりも冷静でなければいけないと教えられていた。
「大丈夫だ、心配ないさ。朱鷺羽家の人間は丈夫に出来ている。家に帰って治療を頼むと良い」
青年が去る。
（脈は……大丈夫。さっきあの人が止血してくれたし、命に別状は

無い）
だが、急がねばならない。危険な状況であることに変わりはない。
京は、咲炉を背負う。
（重い）
ここから白月病院まではそう、遠くない。京の体力的にも無理な距離ではなかった。
京は咲炉を背負って歩く。
（……はぁ、ちゃんと言えなかったな……）
平常心を保つため、そんな事を考えていた。

第2話　ある夜の出来事（後書き）

更新が思ったより遅くなってしまった。反省です。

第3話　住んじゃえば？

「……天井？」
咲炉が目を覚ましてからの第一声がそれだった。
翌日の早朝。気持ちの良い朝だ。
「目が覚めた？」
傍らに立つ白衣の医者が訊ねる。
そろそろ目覚めるだろうという女の勘が働き病室まで足を運び、見事的中させた。
「ここは？」
「病院よ」
ニッ、っと無邪気な笑顔を見せ答える。
「病院？」と疑問符を浮かべる。記憶を上手く整理出来ていない。今、咲炉はなぜここに居るかすら理解出来ていない。
「あなたは怪我をしたのよ」
「オレが怪我を？」
全身を触ると激痛とまではいかないが、痛みが走る。成る程、確かに怪我があるらしい。
「そうよ、大した怪我じゃないけど」
頭を働かせる。そして、思い出す。あの化け物から京を庇って倒れた事を。
「ああ、そうだった」
ぽんと手をつき、納得したポーズを取る。
「白月さんは？」
「無事よ。……妹を助けてくれてありがとう。」
咲炉は安堵の息を吐く。
医者は深くお辞儀をする。
「大丈夫そうね、私は仕事に戻るわ」
背を向け歩き出す。

「……ああ、そうだ、一応自己紹介ね」
「知ってると思うけど」と付け足す。実有の場合自分を知らない人間に会う事が少なく、自己紹介もおろそかにすることがある。恩人である咲炉にはきちんとしておこうと思ったのだ。
振り返り、咲炉の顔を見て、
「私の名前は白月実有（しらつきみあり）。自由に呼ぶと良いわ。朱鷺羽咲炉君」
「はい」
咲炉は返事すると、実有はさらに続けた。
「あと、住む場所ないなら、ここ（私の家）に住んじゃえば？」
「良いんですか？」
「もちろん」
「……お願いします」
咲炉は深々と頭を下げる。
「うん、わかった、これからよろしくね、朱鷺羽君」
実有が部屋から出て行く。
「良かった……住む場所が出来て……」
住める場所を見付けられて思わず気が緩んだ。……少し眠い。咲炉は少し休む事にした。

廊下をスキップする実有は、
（キョウちゃん喜ぶだろうな～）
妹の喜ぶ顔を想像して、ニッ、と笑った。

◆

――昨晩

「手術終了～もう安心よ」

手術といっても、ほとんどやることはなかった。結晶化魔術により、傷口は塞がり、自然治癒力が高いのかもう治りかけていた。
結果、怪我の検査だけで終わった。あまりにも京が心配するものだから、仕方なく手術室を開いたというわけだ。
「本当？」
「嘘付いてどうなるの？」
「良かったぁ～」
京は安堵の息を吐く。
「今日はもう遅いし、眠ったら？」
「うん……あ、お願いがあるんだけど」
「何？」
実有は素っ頓狂な顔をする。京が実有に何か頼む事などほとんどないのだ。だから、自分に叶えられる願いなら叶えてあげたいと思った。
「朱鷺羽咲炉くん何だけど……家が無くなって無一文らしいんだ……だからその……ここに住まわせてあげないかな……？」
「嫌だ」
即答。
「えっ？」
実有は筋金入りのシスコンである。だから、異性を住まわす事など論外。有り得なかった。
「だって、異性を一緒に住まわすなんて……何か間違いがあったらお姉ちゃん、殺しちゃうかもよ！」
その時、実有の手に電流走る。比喩ではなく、魔力を電気に変換している。
「お姉ちゃん、私を庇って死にかけた人にその対応は酷いよ？　それに、朱鷺羽君、住む場所なくて、もしここで住めないなら公園生活だよ？　そこで症状が悪化したらお姉ちゃんの責任だよ。白月病院の評判もガタ落ちだよ！」
「うっ……」

珍しい鋭い妹の発言が刺さる。そもそも、実有と京は口喧嘩すらまともにしたことがない。だから、京の言葉が深々と胸に刺さった。急所に当たり、効果は抜群だった。
「……！」
実有は名探偵が閃いたときの様な顔をする。
「はにゃ～ん」
実有は奇妙な声を上げる。少し悪い顔をして、
「まさか……朱鷺羽君にほれたなぁ～？」
京の核心を突いた。
「えっ！　違うよぉ！　全然、その、だから、とにかく違うの！」
必死で否定するも残念ながら説得力はなかった。顔は真っ赤で落ち着きはない。声は裏返っていた。
「ほうほう（朱鷺羽家の子か、家柄良し。ご先祖様の縁もあるし、我が家にとっても悪い話ではない。本当はキョウちゃんを誰かに渡したくなんて無いけど……本人の意志は尊重してあげたいし……）」
「でも、困ってるわけだし、この通り、お願い！」
「ああ、この笑顔に弱いのよね」と観念して「わかったわ。許可する」実有は諦めた表情で息を吐く。
「ありがとう、お姉ちゃん」
「ただし、条件がある」
「何？」
「一つ、仲良くすること」
「うん」
「二つ、不純異性行為は認めない。学校にばれるのも好ましくない。そういう事はちゃんとお付き合いしてからね」
「あっ……うん」
顔を赤らめる。年頃の男女が一つ屋根の下。何か間違いが起こるかもしれない。それもあって反対されたのかと今気付く。
「三つ、お姉ちゃんの言う事を一つ聞くこと」
「わかった。お安いご用だよ」

「それがわかったなら、よし。もし破ったら悪いけど、朱鷺羽君にはこの家を出て貰う。良い？」
「うん」京はうなずき喜ぶ。後は、咲炉がこの家で住むことを選ぶかどうかだった。

◆

「ふむ」
咲炉は自分の身体の傷を確認する。朱鷺羽家の人間は肉弾戦を主体とした魔術師の家系。身体が資本。だから、怪我には少し気を遣えと幼い頃から言われてきた。
「怪我は大した事無いようだな」
服も綺麗に治っていた。最近の魔術は進んでいるなぁ～と咲炉は心から感心する。
（持ち物は全て焼けたし、無一文。住まわせて貰うのは本当にありがたいな……）
病室を歩き回る。特に休む様にとも言われていない。別に動いても問題無いはずだ。だから、じっとしていられなかった。ホームレスに学んだ鉄則その1、行動力の無いものは生き残れない。
（だから、行動あるのみだ）
咲炉は病室から飛び出す。実有にあって「何かあることはないか」と訊ねるために。

～数分後～

「……ここ何処だ？」
馬鹿みたいに迷子になった。この病院で迷子になるのは難しい。それに、道案内の標識もある。

咲炉のすぐそこに『医院長室』まで～と書いてあるのだ。方向音痴はまず、標識を無視する。勘に頼って行動する。だから、迷うのだ。

「まぁ、歩けば誰かに会うだろ」

そうは言うが、この道を通ったのは早くも三度目。ついでに人に会ってない。

(誰かいないかな？)

目的が『実有に会いに行く』から『誰かに会う』にすり替わっていたが、気にしないことにした。

もうしばらく歩いて、ようやく咲炉は人らしき影を見付ける。

(金色の髪……ああ、あの子か)

咲炉の頭に京の顔が浮かぶ。

咲炉は小走りして、京の肩を掴む。

「あの——」

京は振り返る。

「………きゃぁあああ！！」

顔を真っ赤にして、京は大声を上げながら走り出した。

「………」

取り残された咲炉に残ったのは、「一緒に暮らす事に……なるんだよな……？」という不安な気持ちだけだったという。

第3話　住んじゃえば？（後書き）

まどまちと同時進行で書いて行きたいです。こっち書くの優先したいな～

少しチェック不足かもしれません。誤字脱字は気づき次第修正。もしあったなら気軽にご連絡ください。よろしくお願いします。

第4話　住めるのか？

「いやーご飯おいしい。今日一日頑張った甲斐があるわぁ」
実有はニコッ、と笑顔を作る。対象的に二人の顔は暗かった。
食卓には京と咲炉が向かい合わせに座っている。
さっきから二人は何となく目があっては目を逸らすという動作を繰り返している。
「「（気不味い！）」」
実有が何とかしてくれないだろうか？　と思うが、無理だった。
しかし、本当においしくご飯を食べるなぁ、と咲炉は感心した。
（どうしようか……姉さんで女子慣れしてるせいなのか、肩を掴むという行動を普通に取ってしまった。やはり、駄目なのだろうか？）
（いきなり肩捕まれて逃げた私がいけないんだよなー……それに、仲が悪いと知れたら、朱鷺羽君は即刻この家から出される。それだけは避けないと……）
二人の思いが重なり、
「「あの！」」
声まで重なった。
「し、白月さんからどうぞ……」
「と、朱鷺羽くんからどうぞ……」
「いや、大した事じゃないから、白月さんからで良いよ」
「私もそんな大したことじゃないから、朱鷺羽くんからどうぞ」
「ハッハッハ」
実有は思わず笑う。
「この場で一応説明しとくわね」
実有は、二人を気遣い話題を作る。
「1～3階は病院。4階と5階が居住スペース。私は4階にいるからね。5階に朱鷺羽君とキョウちゃんがいるって事になる。食事は4階で。キョウちゃんに後で朱鷺羽君の部屋案内させるから心配し

ないでね。……あと、朱鷺羽君。キョウちゃんに手を出したら『コロス』から気を付けてね～」
『コロス』という言葉が強調されていた。笑顔で物騒な事を言いれ、咲炉は凍り付く。
（この人本気だ）
そう思わせる程の迫力だった。
「さて、これくらいかな。私はお邪魔虫だろうし、この辺で。明日も早いから今日は眠るね。じゃ、また明日」
「おやすみなさい」「おやすみ」
二人があいさつすると、実有は上の階に去って行った。
「……」
「……」
沈黙が続く。
だが、ここで黙るのはホームレスの皆に示しがつかない。だから、咲炉は取り敢えず行動に出た。
「白月さん」
「ひゃ、ひゃい」
完全に噛んだ。
「さっきは、ごめん。いきなり背後から肩掴むのはちょっと……無かった」
「そんな事無いよ！　むしろ、大袈裟に驚いてごめんね。逆に驚いたでしょ？」
「いや、オレが悪いんだから謝らなくて良いよ」
「いやいや、私が悪いんだから！」
「いやいやいや」
「いやいやいやいや」
いやいや合戦がしばらく続く。
その内二人は笑っていた。
「白月さん。この家での生活。しばらく慣れるのに時間が掛かるかもしれない。これからよろしく」

「こちらこそよろしくね、……（咲炉くん）」
まだ下の名前で勇気呼ぶ勇気は京にはなかった。だから、今はせめて聞こえない様にそう言った。
「じゃあ、片付けちゃおうか」
「ああ、食器洗いはだ！」
二人は食器を流しまで持って行く。
「じゃあ、朱鷺羽くんは洗剤流すのお願い」
「わかった」
二人は黙々と洗う。咲炉も家事が出来ないわけではなく、むしろ出来る方だった。姉にせめて家事だけでも勝とうとした努力の結果とも言えた。
「きゃ」
「あっ、悪い」
互いの手が触れるというハプニングも多々あった。
咲炉は特にそれといった感情は抱かず、逆に京は死ぬほどドキドキしていた。
（ああ、もう死んで良いかも……）
京はそんな事を思っていた。
京の至福の時はそう長くは続かず、しばらくして終わった。
「また明日も食器洗い手伝うよ」
「あ、うん……ありがとう（毎日こんな事続けて私、保つかな……？）」
少し心配になったという。
二人はタオルで手を拭き、部屋へと向かう。
「……白月さんの隣の部屋か」
「あっ」
（そっか、一つ屋根の下だもんね……）
再認識。意識すると、京は咲炉の顔をまともに見れなくなっていた。
「じゃあ、また明日」

「ああ、また明日」
二人はそれぞれ自分の部屋に入って行く。

≪咲炉の部屋≫
部屋には机があった。あと病衣。その上には「寝巻きに使ってね」と、書いた紙がおいてあった。
すぐに着替え、着ていた制服をたたむ。ベットに横になる。
「ふむ、眠れないな……。そもそも、今日起きたの昼だからな……。う～ん」
折角なので、頭の整理をすることにした。
「……え～と、住んでいた寮が燃えて、住む場所探して、白月さんに出会って、化け物に切り裂かれて……」
そこまで回想するとすんなり眠くなり、眠った。

≪京の部屋≫
「……眠れない。隣に咲炉くんがいると思うと……」
口を塞ぐ。壁一枚だけで、もしかしたら自分の声が咲炉に聞こえてるという可能性が無いわけではない。
自分の部屋がまるで他人の部屋かの様に感じられた。
「こんなんじゃ眠れないよ～」
その晩、京は緊張で眠れなかった。

第４話　住めるのか？（後書き）

こっちの方も進めないと、ですね。毎回２０００文字前後を目安に書いてますけど今回は少し短めでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3760w/

魔術師の街へようこそ

2011年9月30日03時16分発行